■ひとりでに覚える

幼児の漢字教育に反対する人は、必ず「幼児には、知的な教育よりも、情操教育や社会性を養ふ教育の方が大切である」と言ふ。「漢字教育をすれば、情操教育や社会性を養ふ教育が出来ない」とでも思ってゐるらしい。実に思考が単純で浅い。実は、漢字教育を行へば、情操教育も社会性を養ふ教育もうまく行くのである。

そもそも、幼児の漢字教育は、「漢字を教へることを目的とする」ものではない。「漢字で教へる」教育なのである。情操教育の時間をへらして漢字教育をするわけではない。「情操教育を漢字でせよ」といふのである。さうすれば、幼児は先生の話を耳で聴くと同時に、漢字をも目で視るから、大切な内容を耳と目とから同時に頭の中に入れることが出来るので、学習効果が著しく良くなるからである。

例へば、こんな話がある。足立区梅島幼稚園の山下宏一先生は、毎年、立冬の日には“立冬”のお話を園児たちにしてゐたさうであるが、その翌日、子供たちに質問してみると、“立冬”といふ言葉を覚えてゐる子供はいつも一人もゐなかったといふ。ところが、“立冬”といふ漢字カードを使ってお話をした翌日は、どの子も“立冬”といふ言葉もその意味も覚えてゐて答へられたといふのである。

アメリカの学者の実験報告によると、耳で聴いただけの記憶は、三日後には一〇パーセントしか頭に残らないが、それを耳で聴くのと同時に目で文字として視た場合には六五パーセントも記憶に留まる、と言ふ。だから、耳で聴いただけでは記憶に留らない事でも、文字として目で視ると記憶に留まり易くなるのである。

さういふ訳で、情操教育でも社会性を養ふ教育でも、その他どんな教育でも、耳に訴へるだけの今の教育では、幼児の記憶に留まるものが少なくて効果に乏しいが、これを漢字で書いて幼児の目に訴へながらお話をしてやれば、よく記憶に留まるので、どんな教育でも効果が著しいのである。

このやうに「漢字で教へる」教育をしてゐると、その結果として幼児は「ひとりでに漢字を覚える」けれども、それは幼児が漢字を覚えようと思って覚えたものではない。予期しない自然の結果なのである。幼児は、「覚えようと思はないのにひとりでに覚えられる」といふ特殊な能力を有ってゐるので、指導に当る者は「漢字を教へよう」と努力する必要がない、といふよりもむしろ「教へよう」と思はない方が良いのである。

この事は、漢字を軽視してさう言ふのではない。それどころか、漢字はどんなに尊重しても尊重し過ぎることは無い、とさへ私は思ってゐる。それにも関はらず、「漢字を教へよう」と思ってはいけないと言ふ理由

は、漢字の学習は、言葉の学習と同じやうに、「ひとりでに覚える」ことが非常に重要だと思ふからである。

ひとりでに覚えたものは、大よそ忘れにくいものである。一生涯の記憶になるものが多い。これに反して、覚えようと努力して覚えたものは、大抵、目的があっての事であるから、その目的が果されると、忘れるのが普通である。だから、今の学校教育のやうに、漢字を覚えることを目的とする学習では、テストが済めば忘れてしまふので、本当の役には立たないのである。

幼児は言葉を“ひとりでに”覚えるのである。それでゐて、四段活用でも上一段活用でも、カ行変格活用でも皆、必ず正しく使へるやうになる。幼児はそれだけの能力を、皆備へてゐるのである。その幼児が、言葉よりもずっと覚え易い漢字が、ひとりでに覚えられない訳が無いではないか。

それに、自分から進んでやりたいと思ってゐる事でも、他人から「やりなさい」と言はれると、途端にやる気が無くなってしまふ、といふのが人間の自然の情である。幼児期の幼児は、皆好奇心が強く、とりわけ漢字に関心を有つのが自然の姿であるから、それに任せてゐれば良いのであって、決して、「漢字を覚えなさい」と言ってはならないのである。